プロプリウス21とは?

法人化以降、「知の社会還元」は本学の重要な課題となっている。その方策として産業界との共同研究が挙げられるが、従来の産学共同研究には研究自体が第一目標になってしまい、企業と大学で成果目標が共有できないこともあった。また、徐々に研究テーマが矮小化する、最終的な実用化の出口がない等のケースもあった。「共同研究に着手したは良いものの、思うような『知の社会還元』が実現しない」という状況が時にはあったのだ。そこで本学産学連携本部が考案したのがProprius21というスキームである。

Proprius21は共同研究そのもののスキームではなく「計画作成プログラム」である。研究開始前に、テーマ、メンバー、資金、スケジュールを十分練るための枠組みなのだ。具体的には3つの活動により遂行されていく。まず「プラザ活動」。産学官有志が自由に意見交換する活動だ。この場で、産業界からは市場ニーズが、官公庁からは様々な政策等が、大学からは技術の種（シーズ）が提示される。次に「個別活動」。小グループ討論等により共同研究テーマを具体化させ、学内の研究メンバー候補者を集めていく。その際、技術コーディネータが候補者探しを手伝ってくれる。最後に「スロット活動」。特定研究テーマを立案する組織を「スロット」と呼ぶが、このスロットにより目的、期間、分担者、アプローチ方法、費用、期待できる成果、社会貢献、問題点への対応策等を「研究計画」として策定する。スロット経費で専従技術コーディネータの雇用も可能。研究計画はレビュアによるレビューを受け、一年以内を目安に完成度を高めていく。計画が実行可能になった段階でスロット活動は終了。Proprius21も全行程を終了し、共同研究が開始される。

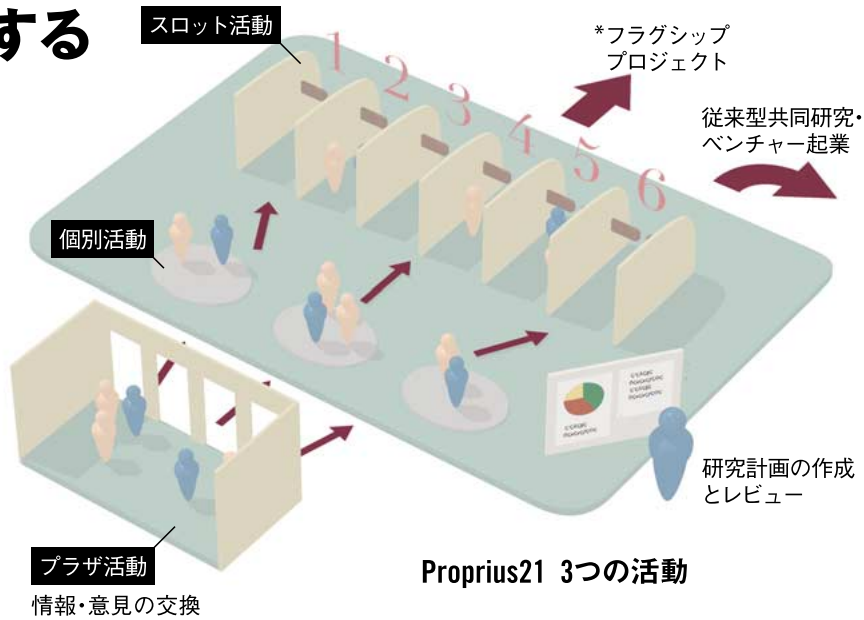
知の社会還元の効果的な実現。Proprius21はまさに、そのためのツールなのである。

産学連携本部

「知の社会還元」を実現するProprius21

企業との共同研究を成功させるために考案された「共同研究計画作成プログラム」、Proprius21。このプログラムにより策定された共同研究は現在、「知の社会還元」を着々と実現しつつある。

Proprius21における、研究プラン策定までの流れ。プラザ活動、個別活動、スロット活動の各フェーズで産官学のポジティヴかつ建設的な議論が展開されていく



Proprius21 3つの活動

【実例】「生活支援ロボット」をテーマとした松下電器産業との共同研究

Proprius21を使って共同研究に着手した例として松下電器産業（以下、松下）との共同研究がある。この研究の現在までの流れを紹介しよう。まず、松下が生活支援ロボットに目標を定めて学内全体に新規シーズ公募を行なったのが2004年11月。集まった企画案が12件。2005年1月に松下社内での第一次審査を経て東大・松下合同検討会議を行い、12テーマ中、4テーマの採用を決定した。その後は同年3月～7月、各企画をブラッシュアップしていった（スロット活動）。この作業は企業・研究者の両者にとって初の試みであり、様々な試行錯誤があったようだ。

「先生方とのミーティングを各5回から7回、行ない、摺り合わせていきました。その間、紆余曲折があって。現在、センサー融合技術関連の共同研究をお願いしている先端研の矢入先生には何度か企画を練り直していただきました」と松下電器産業産学連携推進センター・平岡省二推進担当参事。本学先端科学技術研究センター・矢入健久講師の企画案は松下のニーズとのズレがあり「企画変更を」との提案が松下側からなされたそうだ。

「松下さんから変更を提案されたことは新鮮で面白かったです。新たな研究課題を与えられた気分でしたね」と矢入講師。その後は4テーマとも建設的な議論が展開され、徐々にテーマの詳細やプランが固まっていった。こうして、2005年7月、合意に至った3テーマのキックオフ会議が開催され、晴れて共同研究契約が締結されたのだった。

Proprius21で策定されたこれらのテーマはその後、大きく発展していくこととなる。

生活支援ロボット 共同研究開始までの流れ

2004年11月	生活支援ロボットについての新規シーズを本学全体から公募開始!
2004年11月	共同研究テーマ創出を目指したワークショップ（意見交換会）を実施
2004年12月	学内6部局より、12テーマの提案が集まった
2005年1月	東大・松下合同で提案テーマの一次選考会議を実施。4テーマに決定した
2005年3月～7月	実施テーマ提案者（東大側）と松下担当者がテーマ別に検討会議。双方が納得するまで、ターゲット・計画をブラッシュアップしていった
2005年7月	キックオフ会議を開催。テーマレビューが行なわれ、共同研究契約が締結された

その後……

「生活支援ロボット」共同研究は「少子高齢社会と人を支えるIRT基盤の創出」プロジェクトに発展し、文科省・科学技術振興調整費プログラムに採択された。

※詳細は以下の「産学連携本部ホームページ」をご覧ください。
URL:http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

*フラグシッププロジェクトとは
これからの日本や国際社会を担う大型研究のこと。

東京大学創立130周年記念事業

時代の先頭に立つ

東京大学は2007年4月12日をもって創立130周年を迎えます。これを機会に、本学では2006年11月から1年あまりにわたって『130周年記念事業』を展開していきます。ここでは、この記念事業の趣旨やシンボルマーク等についてご紹介します。

濱田純一
記念事業実施委員会委員長
東京大学理事・副学長

世界では、政治経済や技術・生命などの分野で高度な課題が発生し、グローバルな見地からの解決が求められています。一方、それを支える学術は、小宮山総長が指摘しているように、爆発的な知識の増大と、研究の細分化との同時進行により、全体像の把握がままならなくなっています。こうした両極端の状況の中にあって、統合された知に対する社会の期待は高まっています。課題先進国日本の代表的な知の府として、学術の統合を担う東京大学の役割は、ますます大きくなっています。

国立大学法人化を経て、東京大学はいわば「第三の創業」ともいうべき段階にあります。この段階をとらえて、東京大学のあるべき姿と進むべき方向をあらためて世に問い、多くの方々とこれから歩むべき道のりを共に語り合う機会として、創立130周年記念事業を行います。未来に向けて、「東大としてのアイデンティティ」をこの事業で表現していきたいと考えています。そのため、教職員や学生、さらに卒業生の皆様にも、事業への積極的な関与と参加をお願いしています。また、事業を通じて、志を同じくする社会のさまざまな方々にも広く呼びかけ、連携支援のきっかけとなるよう期しています。多くの人々の参加による多様な記念事業を通じて、東京大学のこれからの姿や次の時代を支える思想をお伝えできればと思います。

130 周年記念事業 公式シンボルマーク

このマークは「知の生命体」をコンセプトにデザインされています。未来に向かう東京大学の「新しい知」を発見し続ける力と「新たな才能」を育み続ける力を、成長・進化を続ける〈未来的な、知的な生命体〉として表現しました。21世紀の様々な学問的社会的なテーマに積極果敢に取り組む姿勢、専門領域や国境の壁を越えて生み出される〈知のダイナミズム〉をも象徴しています。

入選マーク＆入選キャラクター

130周年記念事業公式シンボルマークを決めるにあたってマークとキャラクターを募集しました。多数の応募作品が集まり、その中から公式マーク１点、入選マーク３点、入選キャラクター３点が選ばれました。

入選マーク３作品

丸尾圭祐さん 作品

東京大学のシンボルである、いちょうの葉をデザインベースとし、学問の世界を包み込むスケール、さまざまな学問分野の連関、独立性、外の世界に開かれた様を表現しました。

モノクロで印刷された場合の可読性にも配慮しました。

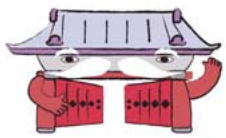
筑紫一夫さん 作品

二つの円の重なりが、東京大学と社会との関わり合いを表し、その関わりの中から生まれる無限の可能性を（∞）をモチーフにデザインしました。シンメトリーなフォルムは、人や社会、研究に対して誠実に向き合う東京大学の姿勢を表現しています。

小石澤泰子さん 作品

外形を形成する３つの輪は本郷・駒場・柏という新時代の東京大学三極構造を示す一方、新時代における「人」と「人」、また「社会」と「大学」という関係の重要性を示すものである。後者に関しては中央に位置するUTの文字（Uは逆転させている）を人と人が手を取り合っているようにみせることでも表現している。さらに中央に存在する扉は未来への扉を意味し東京大学が新時代に未知のステージへと挑戦しようとしていることを示している。

入選キャラクター３作品



溝口照康さん 作品

【愛称:赤門爺（あかもんじい）】

国の重要文化財であり、東大のシンボルでもある赤門をモチーフにしたキャラクターです。古くからその門を開いて、来る人を迎え入れる威厳ある姿、それでいてあたたかい雰囲気を表現しました。

市村桃子さん 作品

【愛称:U-Tan（うーたん）】

「University of Tokyo」のUTをキャラクターにしました。顔が「U」、体が「T」をもじったウサギの『U-Tan』です。口は安田講堂の形を簡略化し、体の真ん中には東京大学のシンボルであるイチョウを描きました。ウサギのイメージカラーであるピンクと自然豊かなキャンパスをイメージして体のTの部分を黄緑にしました。みんなに愛され、身近に感じてほしいと思い『うーたん』と呼びやすい名前をつけました。

宮崎彩さん 作品

【愛称:Gustoff（ガストフ）】

130年という長い歴史の中で常に日本のトップに居続けてきた東京大学ですが、これからはさらなる飛躍を望まれています。

グローバル化や世界との競争の中で、これまでの伝統（いちょうで表しました）にのっとって、さらなる飛躍となる、世界の “gust of wind” となるような、明るい未来を示すキャラクターにしました。

伝統の上に成り立つ東大の新しさを描きました。

※今後、行なわれる予定の企画に関しましては、以下の「130周年記念事業サイト」をご覧ください。
URL:http://www.130ut.pr.u-tokyo.ac.jp